

私が彼と出会ったのは彼が 3 歳のときであったからもう 35 年前のことである。ポリオで下肢にマヒがある彼は歩行器で元気に動き回っていた。清楚で美しい顔立ちの母親はひとり息子の彼のために、毎日通園施設まで送り届けていた。彼が小学校に進学するとき、教育委員会は彼に養護学校の判定を下した。しかし母親は通常小学校の通常クラスを希望し、教育委員会の判定を頑として受け入れなかった。彼は地域の通常小学校に通学し、松葉杖に支えられてすくすくと育った。中学校も地域の中学校に進学した。しかし、ここで彼は障害をネタにいじめにあった。彼の障害に対する無理解からのいじめであった。母親は学校に行き彼を全力で守った。そしてその頃、両親は離婚し母親は派との事務職に就いて生活を支えた。

高等学校に進学した彼は、友達に支えられながら順調に学生生活を過ごし、しかし母親は仕事を退職し、きわめて質素な暮らしが強いられた。母親は、国民年金の保険料の負担から逃れるために、年金辞退の手続きをとった。高校卒業した彼は一般企業に就職した。就職した先は障害者の雇用を理解のある会社で、彼はパソコンを用いてデータを入力する業務であった。数年たって彼は社内で卑劣で理不尽ないじめにあつてその会社を退職した。このころ親子の生活は、彼の収入と身体障害 2 級の障害年金が収入の全てであった。彼は会社を辞めたが再就職先がない。身体障害の彼は自家用車が足代わりでその駐車場が勤務策に必要であるが、その条件が就職を困難にした。失業保険も切れるころようやく就職したが、自給の臨時職員であった。そして母親は悪性腫瘍に犯され、治療の費用を気遣った母親はその検査を断った。それから 10 ヶ月、腫瘍は命を脅かし、発見から 1 年 3 ヶ月で帰らぬ人となった。近くに親族はなく、葬儀はきわめて質素な中で数人に見送られて終了した。一人になったしたい不自由者の彼との付き合いも 30 年を超え、3 歳出であったとき、このような彼の人生は予測してはいなかった。

この春から joy ひこばえの施設長に就いた。3 歳の子どもたちとの新しい出会いがあった。この子らの将来にどんな光と陰が待っているか。子ども達の生きる力を支援したい。

Joy ひこばえ施設長 緒方克也